

Title	看護業務スケジューリング分析に関する研究
Author(s)	横内, 光子
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/46300
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	横内光子
博士の専攻分野の名称	博士(看護学)
学位記番号	第20201号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学系研究科保健学専攻
学位論文名	看護業務スケジューリング分析に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 大野ゆう子 (副査) 教授 城戸良弘 教授 鈴木純恵

論文内容の要旨

看護スタッフが一日の業務を実施するにあたり、各作業について何を基準にどのように組立を考えていくかを分析するための方法論(看護業務スケジューリング分析法)を検討し、臨床的検討として実際の病棟看護業務タイムスタディデータについてこの方法論に基づき分析を行った。

看護業務スケジューリング分析方法は、外科系病棟勤務看護師3名のインタビューデータをもとにエスノメソドロジーによるワードマイニングにより検討した。その結果、「確定性」、「予測性」、「時間限定性」、「進行形式」が業務のスケジューリングにおけるポイントとして抽出され、それぞれの下位分類として2から4のカテゴリが得られた。

このポイントとカテゴリを用い、調査当日午後手術室へ搬送予定の外科手術患者を担当した看護師のタイムスタディデータを分析した結果、1)確定性と時間限定性の高い手術関連業務が業務全体のボトルネック業務となっている、2)手術室搬送業務に余裕を持たせるスケジューリングが行われている、3)手術搬送時刻前の時間帯には複数の業務の過密化や中断が発生していることが示された。

以上より本研究で見出されたポイントとカテゴリは、看護業務の実施過程について多視点から具体的に検討するにおいて有用であり、看護業務スケジューリングの特性を可視化し評価する方法論として有効であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

医療の高度化、医療費の削減、在院日数の短縮化が進む今日の医療において、一定の質を保証し、なおかつ効率化を図るための方法論の開発は重要な課題となっている。特に看護サービスについては、臨床の現状を的確に反映し、効率化や質の保証に活用可能なサービスの生産管理方法の開発が早急に望まれている。

本論文は、看護業務をスケジューリングという観点から検討し、看護業務を整理する新たな基礎的概念を提示しており、それによる看護業務のスケジューリング特性の可視化に成功したものである。

本研究では、まず外科系病棟の臨床看護師を対象としたインタビュー調査から、エスノメソドロジーによりスケジュールのポイントとカテゴリを抽出した。抽出したポイントは、「確定性」、「時間限定性」、「予測性」および「進行

形式」であり、外科病棟における業務スケジューリングの基準となる概念といえる。次に、このポイントとカテゴリを用い、実際の看護師のタイムスタディデータを分析し、手術関連業務が他の業務に大きな影響を及ぼすボトルネックとなっていること、ボトルネック業務に余裕を持たせるスケジューリングが行われていること、ボトルネック業務の前段階で業務の過密化や中断が発生していることを見出した。さらに、業務スケジューリングポイントの看護教育への活用可能性も示された。

本研究で提示されたポイントは、看護サービスの生産管理の基礎的な概念として、看護業務のスケジューリング特性の可視化、臨床の現状分析、合理的な看護サービス生産工程の改善に大きく貢献できるものとして評価できる。よって、本論文は博士（看護学）の学位授与に値するものである。

